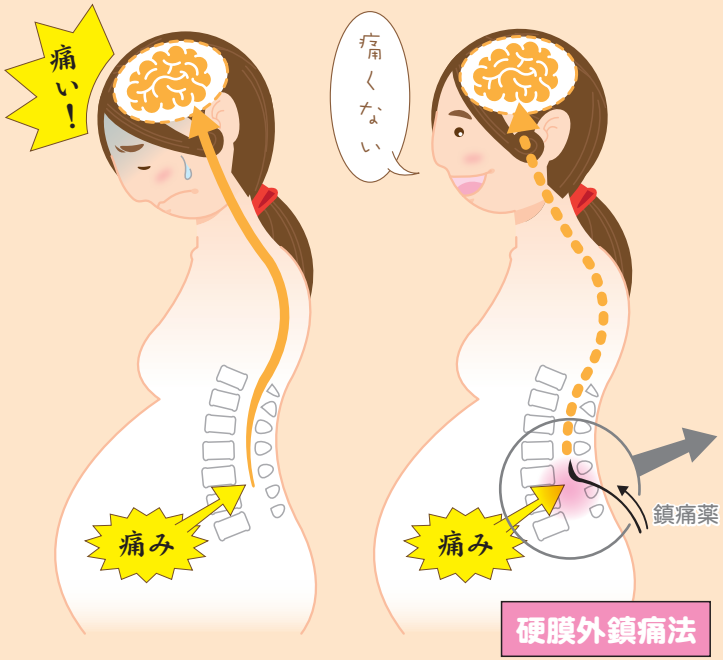
無痛分娩って、こんなにも痛みが楽になるのですね。これだったら何度でもお産ができそうです！

硬膜外鎮痛法を用いて お産の痛みを和らげます。

お産の痛みは子宮の収縮による痛み（いわゆる陣痛）に産道の広がりによる痛みが加わったもので、脊髄という神経を伝って脳に伝えられます。
お産の痛みを最も安全でかつ有効に和らげることができる方法が硬膜外鎮痛法です。この硬膜外鎮痛法を用いた分娩を硬膜外無痛分娩あるいは単に無痛分娩と呼んでいます。

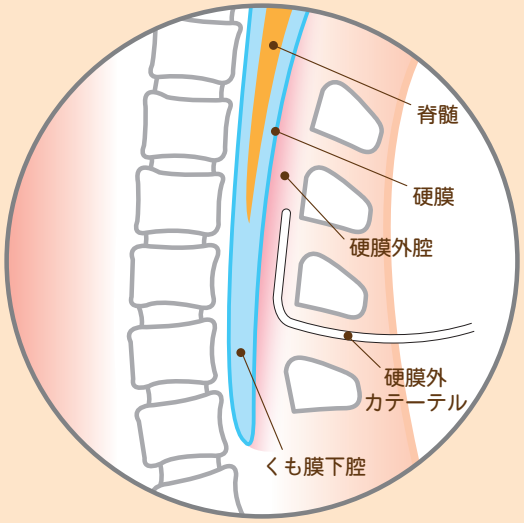
硬膜外鎮痛法は、下腹部から足にかけて下半身だけに軽い麻酔を行う部分麻酔です。

細くて柔らかいカテーテルと呼ばれるチューブを腰部の脊髄神経の近くにある硬膜外腔と呼ばれる場所に入れ、このカテーテルから鎮痛薬を注入します。無痛分娩は下半身の感覚が完全になくなるような強い麻酔ではありません。ベットの上なら自由に動くことも可能です。



◆無痛分娩のしくみ

硬膜外腔（こうまくがいくう）に注入された鎮痛薬は局所で作用し、脊髄神経に伝わる痛みの信号を止めることができます。



無痛分娩をすすめる理由

無痛分娩の最大の利点は、痛みを大幅に軽減することで精神的に落ち着いた状態で出産を迎えられることです。
分娩に対する恐怖心や痛みによるストレスが産婦さんや赤ちゃんに悪い影響を及ぼすことも知られています。不安の強い産婦さんや高齢出産、高血圧や心臓の病気など何らかの問題がある産婦さんの場合、積極的に無痛分娩を行うこともあります。

無痛分娩外来を受診下さい

無痛分娩の専門外来を行っています。麻酔科医師がいろいろな疑問にお答えします。無痛分娩に伴う合併症や注意点などについて詳しくご説明いたします。

硬膜外無痛分娩で起こりうる副作用と合併症

鎮痛薬の作用でかゆみを感じたり発熱がみられることがあります。一時的に赤ちゃんの心拍数が減ることもありますので、無痛分娩を開始した直後は赤ちゃんの様子を注意して観察します。
稀な合併症として、カテーテルが硬膜を越え脊髄のすぐ近くまで入ってしまうことや、カテーテルが硬膜外腔の血管の中に入ってしまった場合、鎮痛薬の中毒症状が出現することがあります。また、カテーテルを入れる際に神経に障害を与える可能性もあります。これらは注意すべき合併症ですが実際に起こることは極めてまれです。私たちは、このような合併症が起きないよう常に万全の注意を払っています。